

エビローグ

エビローグ

日記帳は、八月九日のところ迄、ぎっしりと、細かい文字で、埋めつくされていた。遠い昔の、私の少年時代の筆跡だが、明らかに、今でも、私の字だとは認識できる。私は、そのなつかしい文字を、一文字、一文字、目で追って、一気に読んでしまった。しかし、次ぎのページのページから最後までは、白紙で、何も書かれていなかった。あの頃の自分に、それ以上、日記を続けさせる事は、あまりにも残酷である。白紙であって不思議でなかった。

何も書かれていない白紙の日記帳を見ながら、私は当時の自分を、はっきりと思い出していた。当時、私は、その後、何度も、この日記を手にした。事あるごとに、この日記に、書き加えようとしたが、最後でためらった。

その後、私は勉学に励んだ、クラブ活動にも積極的に参加し、かつ、懸命に努力したお蔭で、秋の英語弁論大会では、優勝した。もしかしてと思ったが、その会場には、あの子はいなかった。

家の家計が更に苦しくなった。母の愚痴を避けて、父は家には帰って来なくなり、事実上、夫婦別居状態になった。その後、父の借金が明るみに出て、事態が非常に深刻なことを知らされた。

その結果、家を売る羽目になり、母と祖母と下の弟二人の四人は、狭い借家住まいになった。一方、私は学校の寮を希望し、兄貴は大学のそばで下宿を始めた。家庭は崩壊し、家族はバラバラになった。

その年の暮れに、私は再び、あの子に会いに八幡の寺で行った。あの子は家にはいなかった。私を避けたのか、あの子は母親に連れられ、弟と三人で名古屋の親類へ行っていった。家には、耳の遠いおばあさんが一人留守番していた様子だった。私の話を通じず、おばあさんは、気をよくしてか、夏に入った応接